



うと有坂さんは自分の理想のクラシック専門局を創りたかったのではないか。われわれ営業部がそれをぶち壊していった。

初代営業部長は後のQR社長・岩本さんで「番組は営業が作るものだ。売れる企画を練り、スポンサーをつける。クラシックでは売れない、つぶせ!」。新人の私たちはその言葉で随分、編成、制作とケンカした。思えば面白かった。その営業の先兵を自負した新人が音楽部にやってきた。有坂部長もさぞ困ったことだったと思う。私とはもともとクラシック好きで、特にドビュッシーだが、今更そんなことは言えない。全員に白い眼で見られてしまう気がした。

### 神戸で人気の電リクを

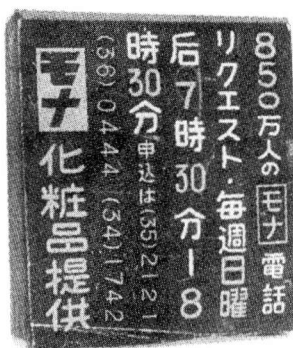
#### 東京のゴールデンで

さて話を電リクに戻そう。昭和32年、大阪のモナ化粧品が、神戸放送の「電リク」の評判がいい。東京でも放送したいと言って来た。日曜のゴールデンアワー一時間の生放送だ。だが音楽部の全員が反対した。番組の送出は2階のスタジオで、レコード室は3階にある。リクエストを聞いて階段を駆け上

がって曲を探す。その間5分以上はかかる。

もしそのレコードが無かったら? 誰かが他の番組で使っていたらどうする。生放送でそんな番組はできない! みんな沈黙した。

こうしたらどうだろうか。私は提案した。放送の30分前か一時間前からリクエスト曲の受付を開始する。聴取者の名前と住所は区までにすれば30秒で一枚のカードがとれる。たとえば受け電話10台で放送前30分で600枚とれる。その間に、最初の15分、CM、TMを入れて3曲は選曲できる。希望はヒット曲が多い筈だ。ヒット曲を10曲も用意しておけば問題は無い。聴取者の声は出さない。番組のテンポがなくなるから。全員が納得しない。聴取者の声



当時の番宣広告

を出さないで何でリクエスト番組なんだ! 葉書の代わりの電話に過ぎない! 喧々こうである。

有坂部長が断を下した。「金子が出来ると言うんだからいいじゃないか。神戸でやっているのに、うちが出来ないというのはみつともない。営業はもう約束しているらしいよ」。

### 電話がパンクしますよ!

早速、技術と一緒に四谷電話局へ行った。「困りますなあ。東京23区に加入電話が50万台あります。そのうち5000台、いや500台が一度に集中してかけてきたら、うちの局はパンクします」。ラジオ東京の話をすると、「有楽町はオフイス街でうちとは規模が違うし、夜は無人になります。ここは住宅街ですからね。受けの電話はできるだけ台数を多く、話は短くして下さい。電話番号の末尾を今週は奇数、来週は偶数をと制限も」。

こうして、東京でのゴールデンタイムの電リク『850万人のモナ電話リクエスト』が始まった。モナの希望で前半歌謡曲、後半洋楽の構成、司会は吉本雅勇アナとアシスタントの女子アナ、850



電話を受けるスタジオ風景

万人は当時の東京の人口だ。

昭和32年9月29日、番組開始。日曜の夜、7時30分から8時30分までの1時間だった。だが翌日、早くも電話局に呼び出された。四谷周辺の一部が20分ほど通信不能になったという。受け電話を増やすこと、末尾制限を厳しくすることとで何とか話がついた。番組をや

めてくれと言いかねない雰囲気だった。

モナは2年半で降りたが、番組は続いた。田辺製菓が提供した時は日曜の午後に移った。

前CMは女性の生理痛用の薬だった。ところが、CMを読むべき女性アナが本番直前にトイレに駆け込んでしまった。本番スタート、止むを得ず吉本アナが読む。CMは女性の会話調だ。「私この頃変なのヨ、アレになるとお腹が痛んで困るの」初見で下読みもしていないから、男性口調に直すことも出来ない。約一分近く、私もミキサーも居たたまれなくなりコンソールの下に隠れてしまった。立ち会っていたスポンサーの課長が苦い顔をしていた。

聴取者との電話を生放送に出さなかったのはよかったと思う。番組のテンポもだが、いやな予感があったのだ。数年後、新聞ラジオ欄の右隣の局でのことだ。昼ワイドで女子アナと話していた聴取者が、なんとあの四文字を叫んだのだ。「貴女としたいー」、女性アナは絶句、ベテランの男性アナがうまくとり繕ったが、こういう手合

じゃあ、お前がDJやれ

スポンサーが代わっても「電リク」は続いた。1960年代、ポップス音楽隆盛の時代、QRは夜の番組をヤング層に絞って、ナイターを止め、昭和39年、電リクを



桑原旦(月) 志摩夕起夫(火) ロイ・ジェームス(水) 吉本雅勇(木) 関光夫(金) 本多俊夫(土)

往時のDJオールスターキャスト

『ハローポップス』と題して、1時間50分の帯番組にした。

この時初めて電話番号を歌詩にした番組のジングルやへ間違ひ電話は困りますなどの言葉も入れ、女性コーラス・ブラックキャッツが歌って番組に挿入した。

D・Jは桑原アナ(月) 志摩夕起夫(火) ロイ・ジェームス(水) 吉本アナ(木) 関光夫(金) 本多俊夫(土)。

ところが困ったことが起きた。今は亡き桑原アナは美文の原稿を読ませると都内中の女性が孕むといわれた程の美声なのだが、フリー・トーキングが不得手。それに横文字が苦手だった。私が横についていて横文字のタイトルをカナにして渡しても不安そうに読む、それが聴取者に分かってしまう。3カ月も経つとノイローゼ気味になって、自分でも番組を降りたいと言いつ出した。新任の小柳制作部長に相談すると「うちで一番ポピュラーに詳しいのは誰だ」「それは私でしょう」とつい口に出してしまったのが運のつき。「じゃお前やれ」。私が月曜のD・Jになってしまった。

私が一年喋って、土居まさるに

バトンタッチした。これがまた大変。土居は「オレ、君、そうだろうな」で、それまでのNHK調のアナウンスではない、若者と仲間意識の兄貴分口調で売り出した、新しいパーソナリティだ。



若者の兄貴分・土居まさる

ゴールデンアワーともなると家族も聴く、「なんだあの言葉は、教育上よくない。責任者を出せ」と年中お叱りの電話。「今後気をつけます」と一応謝るものの、土居には「かまわんからヤレヤレ、そのうち慣れる」とけしかけた。『電リク・ハローポップス』は、1960年代のビートルズを頂点に、アメリカンポップス、ニユー・フォーク、ボサノバ、R&Bソウル、カンツォーネ、シャンソン等あらゆるジャンルの曲を紹介してポップス界をリードした。



1969年サンレモ音楽祭での土居まさるとジリオア・チンクエッティ(右)

ある時、RCAのディレクターから「シルヴィ・バルタンはシャンソンじゃない、ロックだと言う評論家の先生がいらして困っているんです。どちらかに区分しない」と相談された。「フランス人がフランス語で歌っているんだからシャンソンさ。そうだな、新しいイメージを出すためにフレンチポップスというのはどうだい」「それ頂きます」。以来、日本では

フレンチ・ポップスというへんてこなジャンルが生まれた。

### 天災Ⅱ天才フランス・レイのマイクを下げる

フランスといえば「電リク」でも大変リクエストが多かったのがフランス・レイの曲で『男と女』『白い恋人たち』『ある愛の詩』などで、レイを招聘してQRの持つ日本フィル交響楽団とコンサートをする企画が実現した。

最近出版された『昔ここにラジオ局があった』(東洋書店)でも触れているが、信じられない展開になった。

いざ来日して打ち合せの時だ、オーケストラやマイクのセットのためスコアを見せてもらったところ、フランス・レイのパートがない。彼はシャンソンの女王エディット・ピアフの最晩年の頃、彼女の自宅練習の伴奏にスタッフが連れてきた独学のアコーディオニストで、口ずさむメロディメーカーとして天才的だったが、譜面はろくに読めなかったのだ。ピアフと舞台に出たこともオーケストラと共演したことなどないのだ。一

緒に来日したクリスチャン・ゴーパールというかなり知られたピアニストが編曲し、指揮もするといふ。レイは舞台には出ない!という。それではフランス・レイコンサートにならないので、中央に置くコンサートピアノの横にマイクを一本立て、舞台上上がってもらうことにした。3曲目に拍手に迎えられて彼はアコーディオンを抱いて登場したが、弾いているのか、いないのか果然としていた。マネージャーが技術室に飛んできて、レイのマイクを下げるという。ハーモニが狂うから直ぐにきつた」と云うと安心して出ていった。広い武道館なので何一つボロが出なくてよかった。レイの尻を思い切り蹴つとばしてやりたかったが、天真爛漫、ケロツとして憎めないのだ。こんな困ったことはない。困ったことといえばもう一つ。火曜会との共同制作で『9500万人のポピュラー・リクエスト』という番組をやっていた。34社・111局の大ネットD・Jは故小島正雄さん。カウントベアシーが初めて来日したので、ホテル・ニュージャパンにインタビュールに行った。小島さんも初めて会うの

で乗り気だった。マイクをセットすると、突然、「女はどこにいる」。二の句もつげず、「先ず音楽の話を」「ワシのレコードは散々聴いたろう、コンサートはもつといい、来れば分かる。ところで、女はどこにいる」、変な場所も教えられない。インタビュールを打ち切った。

姿は変わっても

『電リク』は永遠に

ところで、『電リク・ハローポップス』は昭和44年に終了したが、



『キンキンのサタデー歌謡ベストテン』の風景



浜松町の新社屋 (山手線から)

この形式は思い出されたように番組に使われている。昭和54年にスタートした『キンキンの火曜ベストテン』(昭和58年終了)。

平成4年のナイター・オフにスタートした『電リク・トキメキ倶楽部』は、月曜から木曜の編成で8年続いた。

現在も、平成17年の10月から、これもナイター・オフでスタートした『電リク・ハローパーティ』(火・金曜の午後6時半～9時)。レギュラー編成では『サタデー歌謡ベスト・テン』。日曜午後1時から4時までの『キンキンのサンデー・ラジオ』など、いずれも電リクである。が、昔とは姿かたちが変わっている。「電リク」と名乗る以上、電話は2、3台置いてあるが、ほとんどがメールとFAXになっている。

社屋も四谷から浜松町へ。「電リク」は名前だけ残って今では新兵器に変わっている。

写真提供

『50YEARS 文化放送』

『昔いかにラジオがあった』

—— 四谷村物語 ——

金子 貞男氏

## 事務局よりのお知らせ

■「伊豆山グリーンクラブ」

閉鎖のお知らせ

同好会活動やご家族旅行で皆さまにご利用頂いた、伊豆山グリーンクラブが、3月末で閉鎖されることになりました。

閉鎖前は、大変混み合うことが予想されますので、ご利用の方は、事務局にお問い合わせください。

■民放クラブ事務局に

パソコンが設置されました

アドレスは次の通りです。

minpok@world.ocn.ne.jp

今後事務連絡や情報交換などに利用下さるようお願いします。

関西民放クラブの編集担当として会報の全国会議でも活発に発言された澤村大司さんが亡くなりました。御冥福をお祈りします。

## 澤村大司さんを偲ぶ

佐脇 俊朗 (YTV)

私の高校時代からの同級生で、関西民放クラブの理事も勤めていたテレビ大阪出身の澤村大司君が、去る十一月八日に亡くなった。

今年一月の定例理事会で、いつも通り隣に座った彼が「年賀状は欠礼したよ」と言う。「どうも億劫で」と。その後、携帯に「検査で入院した」との伝言メモが録音されていたのが、私が聞いた彼の最後の言葉となっていました。

その後、脳内に腫瘍が発見され一月末に大学付属病院で放射線治療を受けた夜に脳内出血を起こし、緊急手術の結果、右半身不随に加えて全く言葉を発せられなくなり、意思を伝える手段を完全に失ってしまった。

その後、奥様は宇治の自宅から一月末に大学付属病院で放射線治療を受けた夜に脳内出血を起こし、緊急手術の結果、右半身不随に加えて全く言葉を発せられなくなり、意思を伝える手段を完全に失ってしまった。

その後、奥様は宇治の自宅か